こころの未来　53

鎌田　東二
上智大グリーフケア研究所特任教授
京都大名誉教授

思い通りにならない世界

揺らぐ憲法の理想主義

平和の精神 さらに深めて

4月23日に行われたフランスの大統領選で、極右政党のルペンと中道独立候補のマクロンが上位2位に入り、5月7日に両者の決選投票が行われることになった。アメリカの大統領選も、共和党のトランプと民主党のクリントンとの一騎打ちになり、トランプ大統領が実現した。投票総数ではクリントン支持が多かったが、代議員数ではトランプ支持が多いというねじれ現象を起こして。世界情勢はどんどん複雑骨折していくような気配である。

何事も思い通りにはならないもの、願い通りにならないものだとつくづく思う。振り返ってみると、わが人生もまったく思い通りにはならなかった。思い願ったことで、実現したものは皆無ではないが、あまりにも少ないことに気づく。そんな思い通りにならないさまをいつしか自嘲気味に「トラタヌ人生（とらぬ狸の皮算用人生）」と呼ぶようになった。本質的に自分はドリーマー（夢見る人間）であり、理想主義者であり、ロマンチストであると思っているが、現実はことごとくそのドリームや理想やロマンを打ち砕く。

釈尊はそんな思い通りにならない生を「苦」と捉え、その苦の代表を「生老病死」の「四苦」に見た。仏教の実践はその苦からいかに抜け出すことができるかというリアルな実践であり、その成就が「成仏」であり「解脱」である。

現状を見るに、私の考えはことごとく安倍政権が実現しようとする政策や方向と反対である。この2月から、森友学園問題や加計学園問題で政権が窮地に追い込まれ、問題点が明るみに出されていつ退陣することになるのかと待ち構えていたが、北朝鮮のミサイル発射やアメリカのシリア攻撃やパリのテロ事件などの世界情勢のさらなる不安定化が安倍政権を利する形になり、さほど揺るがぬ支持率を維持している。まったく思い通りにならないものである。

共謀罪（テロ等準備罪）についても同様である。日本国憲法としては不釣り合いなくらい国民主権と戦争放棄を「恒久・永久・普遍」などの極めて強い言葉で称揚しているが、それが根底から揺らいできている。

前文には、「人類普遍の原理」で、「これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する」とか、「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とうたわれている。

また9条には、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」と明記されている。11条には、「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる」、12条には「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない」。13条には、個人としての尊重、生命・自由・幸福追求に対する国民の権利、14条には、法の下での平等、「人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」ことがはっきりと記載されている。

私はこの日本国憲法を読むたびに、いろいろな違和感やねじれや屈折を感じてしまう。同時に、これほど強い言葉で永久や恒久をうたうこの憲法のこの上ない理想主義と願いを感じて崇高な気分も味わう。今どき世界中でこんな理想主義的な憲法を持っているのは「国民総幸福（GNH）」を国是とするブータンくらいではないだろうか。

そんな日本国憲法の理想主義と、それを成立させた第2次世界大戦の経験と反省と、それが未来に発信している人類史的「願い」を今一度思い起こして、この精神をさらに深めていく責務があると、「トラタヌ人生」を生きてきた理想主義者の私は思うのである。

（阿南市出身）

見聞録　文化

美術

「絵画は告発する」展

作風から伝わる政治性

福住　廉
美術評論家

日本の美術界では非政治的な態度をよしとする風潮が強い。それは戦争画が戦意高揚に加担したとの反省に由来しているのかもしれないが、美術から同時代性を喪失させている一因でもある。現実の政治が虚構性を強めている今、私たちは美術の政治性を取り戻す必要があるのではないか。

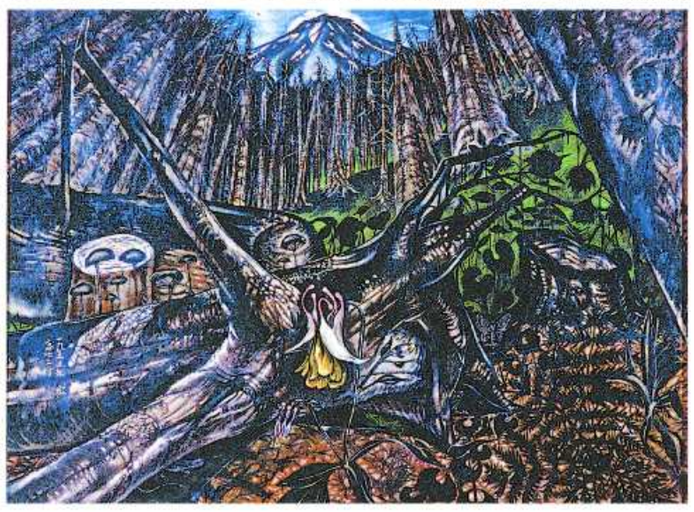
東京の板橋区立美術館で「絵画は告発する」展（6月18日まで）が開催され、社会的な主題を描いた作品が時系列に沿って展示されている。戦前のプロレタリア美術から戦後のルポルタージュ絵画まで、社会の中で格闘してきた画家たちの足跡を体感できる展観である。

井上長三郎「漂流」（1943年、後年改作、板橋区立美術館・寄託作品）

井上長三郎の「漂流」（1943年、後年改作）は、日本兵らが南太平洋を漂流後、帰還した事件を主題にした絵画。同年の「国民総力決戦美術展」に出品したものの、「敗戦的」との理由で当局から撤去されたという。確かに、小舟は水平線が広がる暗い海に頼りなく浮かび、そこに力なく横たわる兵士の肉体も疲労感に満ちている。戦争画に期待されたような戦意高揚とは程遠い。

興味深いのは、井上はこの絵で反戦を訴えているわけではないという点だ。むろん今日では、井上は、戦時中の翼賛体制から一定の距離を保ちながら絵を描き続けた「新人画会」の活動が知られている。だが、それは絵画の中で社会的な不正を告発するような「正義」を体現していたわけではないのだ。

一方、中村宏の「富士二合」（55年）は、山梨県の北富士演習場における米軍の射撃訓練に着想を得た絵画。深い森が広がる富士山の麓から頂上を見上げる極端な構図で、ドラマチックな効果が高い。しかしここでも米軍の兵士や銃器が直接的に描かれてはいない。絵の中にあるのは、林立する針葉樹の前に倒れた木や、それを苗床にした菌類や草花。暗い色調と鋭角的な線によって強調された不穏な雰囲気が米軍の暴力性を想像させることはあっても、それを明示しているわけではないのである。



中村宏「富士二合」（1955年、板橋区立美術館）

井上長三郎と中村宏の優れた絵画から教わるのは、絵を描くこと自体が、政治的になるという厳然たる事実にほかならない。

「にっぽんアニメーションことはじめ　『動く漫画』のパイオニアたち展」の出展作、「東京パック（第11巻25号）」（1915年、京都精華大学国際マンガ研究センター・京都国際マンガミュージアム所蔵、5月30日まで展示）

短信

◆三浦綾子文学講演会　11日午前10時から徳島市南沖洲1の沖洲ぽっとチャペル。12日午後1時半から同市中前川町2の県立文学書道館。全国三浦綾子読書会の森下辰衛代表がそれぞれ「にもかかわらず愛される時奇蹟は」と信仰と文学」「命のふるさとのなつかしさ『母』～小林多喜二の母セキに語らせた三浦綾子の遺言」と題して講演する。いずれも入場無料（12日は資料代300円が必要）。11日は午後1時から読書会の持ち方講座（資料代込み千円）、同7時半から読書会（参加者（徳島県関係）秋月ヒサヨ、岩脇恵子、土方るみ子　同展は東京都美術館（終了）を経て7月25日から30日まで京都文化博物館で開かれる。

◆第1回新日春展入選　林明子原画展（～28日、高松市美術館）「こんとあき」などで知られる絵本作家の世界。

◆これぞ暁斎！ゴールドマン・コレクション（～6月4日、高知県立美術館）幕末から明治に活躍した河鍋暁斎の浮世絵約160点。

◆細見美術館名品展（～6月5日、愛媛県美術館）書画、仏教美術、蒔絵など日本美術の粋を感じさせる約80点。

美術展あんない

■5月■

四国

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）開館から25年の間に寄贈・寄託された中から中川幸夫、やなぎみわらの秀作を紹介する。

◆絵本のひきだし　林明子原画展（～28日、高松市美術館）「こんとあき」などで知られる絵本作家の世界。

◆これぞ暁斎！ゴールドマン・コレクション（～6月4日、高知県立美術館）幕末から明治に活躍した河鍋暁斎の浮世絵約160点。

◆細見美術館名品展（～6月5日、愛媛県美術館）書画、仏教美術、蒔絵など日本美術の粋を感じさせる約80点。

◆じつはいろいろあるんです！（～28日、

関西

◆いつだって猫展（～6月11日、京都文化博物館）猫をモチーフにした浮世絵などで、江戸後期の猫ブームを探る。

◆和ガラスの美を求めて　瓶泥舎コレクション（～6月18日、滋賀県甲賀市・MIHO MUSEUM）松山市にある「瓶泥舎びいどろ・ぎやまん・ガラス美術館」の創設者、大藤範里氏のコレクション。

◆にっぽんアニメーションことはじめ「動く漫画」のパイオニアたち展（～7月2日、京都国際マンガミュージアム）国産アニメ誕生100周年記念。雑誌、映像資料などで4人の先駆者を紹介。誕生の背景を探る。

◆ライアン・ガンダー　この翼は飛ぶためのものではない（～7月2日、大阪市北区・国立国際美術館）コンセプチュアルアーティスト（概念芸術）の旗手と目される芸術家。新作含む約60点。

◆ユトリロ回顧展（～7月2日、姫路市立美術館）初期から晩年までの代表作。母バラドンと友人アンドレーの絵画のほか、タピスリー、陶器など約70点。

◆榊莫山と紫舟のシンフォニー（交響）（～7月9日、京都市北区・立命館大学国際平和ミュージアム）「DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展（～7月23日、奈良県立美術館）奈良とゆかりが深い書家2人の書、書画など。

◆ハンガリーの名窯ヘレンド（～7月30日、大阪市立東洋陶磁美術館）プダペスト国立工芸美術館、ヘレンド磁器美術館など所蔵の約230点で、190年の歴史をたどる。

◆ひと目でわかる京焼300年の歴史　江戸時代のやきもの　仁清・乾山窯と後期京焼の食器を中心に（～7月30日、大阪市中央区・湯木美術館）茶わん、水指などで見る京都の焼き物の変遷。

◆技を極める　ヴァンクリーフ&アーペル　ハイジュエリーと日本の工芸（～8月6日、京都国立近代美術館）フランスの高級宝飾品ブランドと、日本の近現代の工芸作品による技の競演。

◆ベルギー奇想の系譜展　ボスからマグリット、ヤン・ファーブルまで（20日～7月9日、兵庫県立美術館）15世紀から現代に続くベルギーに生まれた奇想の芸術を、絵画、版画、彫刻などで。

「ベルギー奇想の系譜展」の出展作、フェルナン・クノップフ「天使」（1889年　ベルギー王立図書館蔵、The Royal Library of Belgium.All rights reserved.）

【紙面編集】新居和人

第58期 王位戦

紅白リーグ　第6局

●八段　阿部　隆
○八段　木村　一基

【第5譜】（図は○3八とまで）

持ち時間　各4時間
消費　●3時間54分　○3時間47分
指し手　94手

英断の寄せ

○3八と（図）と指した木村はウエットティッシュを1枚取り出し、軽く振って広げた。顔を拭き、首を拭く。右手で首を押さえながら、盤を見つめた。

記録係が「阿部先生、残り25分です」と告げると、「はい」とが、阿部の英断。仕上げにかかった。●3九銀は手筋で、○同とならと、と金の働きが悪くなる。木村は首が悪くなる。木村は首にウエットティッシュを載せたまま、○8九飛～○9九飛成と香を拾った。●7九歩と打たせて将来の●7三歩を消し、合駒に使う香を入手する、攻めながら受ける手順だ。

木村が手順を尽くしたが、○3二歩に●同馬と取るのが、阿部の英断。仕上げにかかった。●5三金で先手の攻めが一手空いて、木村は○8九角（指了図）と打った。○7八角成以下の詰めろだ。首筋にあったウエットティッシュは、いつの間にか外されていた。

（諏訪景子）

（図は○8九角まで）

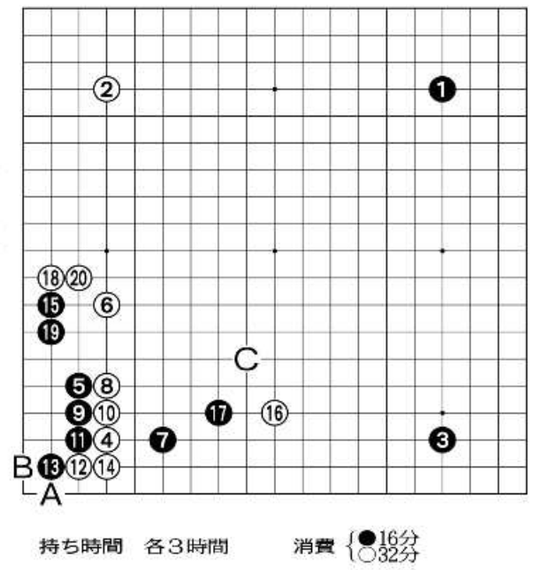
●3九銀6　○8九飛5
●7九歩6　○9九飛成5
●3三香成　○同　金1
○2二馬　○5五角2
●3一馬6　○4四歩
○2二飛成2　○3二歩1
●同　馬　○同　金1
同　竜　○4二香
●4三金　○6一玉
●4二竜　○5一桂
●5三金3　○8九角3

第43期 天元戦

1回戦局
第10局

●七段　李　沂修
○三段　呉　柏毅
（先番6目半コミ出し）

【第1譜】　1－20



持ち時間　各3時間
消費　●16分　○32分

変身

もう6年ほど前のことになる。その少年は日本棋院で行われる棋士の対局で毎週、修行中の院生として熱心に記録係を務めていた。食い入るように盤面を見つめ、何かの糧を得ようとしていた姿が強く印象に残っている。

時が流れ、彼は関西棋院の棋士となった。プロ3年目となる昨年には若手棋戦のゆうち変し、長身でたくましょ杯で優勝を果たし、今や有望若手の一人として将来を嘱望されるまでになった。

今年は碁聖戦で本戦入りしてベスト16へ進出するなど、一般棋戦でも活躍。この天元戦でも本戦入りを成し遂げ、本欄に初登場である。

呉柏毅三段。台湾出身の21歳で、幼さが残っていた6年前とは一い青年へと変身した。自身の碁に手応えを感じているのだろう、その姿からは自信がにじみ出ている。

台湾の先鋭である李沂修七段との対戦は、呉の白番。黒17の時に白A、黒B、白Cと厳しく競っていく選択肢もあったが、実戦は白18、20と穏やかな道を選んだ。

（佐野真）